

第1回「県と市町の地域づくり連携・協働協議会」総会

総会セミナー ~ 「^{うま}美し国おこし・三重」に向けて~ 講演録

日時：平成21年2月10日(火) 15:10~16:10

場所：三重県自治会館 4階ホール

講師：多摩大学経営情報学部教授・大学院 教授 望月照彦 氏

演題：「地域から世直しを考える」

~世界一、幸せな人々が暮らす三重県づくりへのニューディール政策~

皆さんこんにちは。ただいま宮本先生から大変過分なご紹介をいただきました。私、三重とも色々な関係がこれまでもございまして、特にブランド、三重ブランドという案件につきましては、座長と言いますか、そんな役割を仰せつかって、何度もこの津にもいろいろな所にもまいっております。そしてお正月に宮本先生から、三重が非常に大きなルネッサンスの動きがあるぞというお話をお聞きしまして、「^{うま}美し国おこし・三重」というのを拝見させていただきました。大変深く感銘を受けたわけです。今、地域格差や地域の疲弊というような、国にとっては非常に大きな問題がこの地域社会に起こっているわけですが、それに新しい波を起こして、県と市町がパートナーを組んで、新しい正に地方行政の次元を作っていこうという思いとか、期待がこの中に溢れているんです。私、是非これは成功して、日本だけではない「世界モデル三重」ということにぜひならないかなと。そんな思いがありまして、今日お邪魔をしたわけでございます。

したがって今日のお話は、「地域からの世直しを考える」。ちょっとオーバーなテーマのようですが、この三重というのは伊勢神宮もあるわけですし、昔から新たな世を作っていくにはやはり三重から始まらなければいけないというのがありまして、この演題にさせていただいたわけです。「地域からの世直しを考える」という、より始めるといふ、そしてサブタイトルに「幸せ立県」といふ、非常に深く地下水脈のようにこの県には流れているわけですね。そこで私はサブタイトル、この赤い字で書いてありますが、「世界一、幸せな人々が暮らす三重県づくり、そしてそのためのニューディール政策」。

これはオバマ大統領がグリーンニューディール政策ということで、今何百万人の

失業者がアメリカでも出ているわけですね。産業も非常に脆弱になってしまった。環境、産業というものを軸にして、新しいニューディールを展開していこうという思いでオバマ大統領も今考えを作っているわけですが、私はそれに対抗するわけではありませんが、こちらは幸せのニューディール、ニューディールというのはご承知のように再配分ということですが、これも世界に発信できたらいいなという思いで、サブタイトルを付けさせていただきました。

(プロローグ)

今日は7つのお話をしていきたい。お手元に簡単なレジュメがございますが、まず第一に、今世界経済モデルの破綻ということが我々の目の前に来ていますね。三重県下の各市町村の皆さんも、大変今この問題で大きな悩み、壁につきあたっているのではないかなというふうに思います。中心商店街が疲弊をして、物が売れなくなってきた等々含めて、色々な問題があります。これを一体どう考えるか。

2つ目に、アメリカは既に今回厳しい状況にあります。1929年に大恐慌を体験しているわけですね。そしてそれを克服しました。乗り越えたわけですが、その時に非常に注目された政策があるんですね。この政策というものを少し取り上げて、三重にとってどういう意味があるかということを考えていきたいと思います。

そしてこの大恐慌を乗り越えた一番の基本コンセプト、これは「コミュニティ・デベロプメント」という考え方が1929年、ニューデリー政策の中でルーズベルト大統領を中心にして作られたものですね。要するに景気とか地域のいろいろな思いというのを盛り上げていくためには、コミュニティ・デベロプメントというのが大事だと。要するに地域の豊かさを作っていくという発想だったわけですね。すなわち、この「^{うま}美し国おこし・三重」の基本的な考え方は、実はこの地域社会を豊かなものにしていく、29の市町がそういう発想で今日はお集まりになったと思います。まさにこれは、1929年を乗り切った時の最大の基本的な政策課題だったわけですね。

そしてその発想を「地域からの世直し」という新しい視点で協力を推し進めていこうと考えているわけです。そしてそのためには、「A B C Dパートナーシップ」、これは後にお話を申し上げたいと思いますが、この美し国おこしの中にも、ちゃんとこれが表現されていますが、4つの地域セクター、社会セクターが協力して、ダイナミックに地域づくりに邁進するというパートナーシップのあり方があります。

そして私はこういう今お考えの「三重モデル」を作ることができれば、これは世

界モデルにできるのではないかなと思います。グローバル時代、日本の中の一つの県が全世界に対して幸せづくりということで考え方を推し進め、これが世界貢献ということにつながるところまで成功するような事業としてぜひすすめてもらいたいという思いがこの中にこめられているわけです。

そしてそのためには、3つの知恵というものを堂々と作り上げていきましょう。この3つの知恵というのは、1つ目は頭の知恵ですね。そして2つ目は土地に残されている資源、これは三重県は実に潤沢に地域資源が多様な形であります。そして既にこの資源を活用した様々な地域活動が、色々な芽が出ていますね。東京で新聞を開いても、三重ではこんなことが今行われているというのが頻繁に報告を受けているわけですね。これは三重県に来たから言うわけではありませんが、他県にも先駆けたコミュニティ・デベロプメントの動きが私はあるんじゃないかと思います。

そして最後にとっても大事な知恵は、「治める知恵」ですね。今日、町村の首長がおみえになっていますね。皆様の情熱、志やお力が治める知恵、非常に大事な知恵になると。すなわち三重の知恵です。三重県というのは三重ということですよ。この三重の知恵が新しい地域づくりを支えていくものになるぞということでもあります。今日はこの7つのお話をして、皆様の地域づくりの少しでもヒントになればなと思っておりますが、第1章からお話をしていきたいと思っております。

(1 世界経済モデルの破綻)

今世界経済モデルというのが大きな局面にぶつかっているわけですね。これは私が言うまでもありません。サブプライムローンの問題、これはアメリカから起こったわけですね。そしてあれよあれよという間に大恐慌にひよっとしたらなるんじゃないかなという状況が目の前に迫ってきていますよね。1年前にはちょっと考えられなかったわけですが、あっという間にこういう状況が目前にあります。これを乗り越えるためにも、今日のこの連携やそれぞれのパートナーシップというのが大きな意味を持つわけですね。

これは何かと言うと、アメリカにおける住宅の値上がり率を見込んだローンというものを2割買った値段より上がるということになれば、それをローンに組んで、またそれで自動車を買うとか、贅沢三昧をしたわけですね。これは住宅価格が上がっていればよかったんですが、どんと下がる。そうすると借りたお金が返せなくなる。そしてこれを証券で組んでいたわけですね。金融工学という、ノーベル賞をも

らった学者が開発したのですが、うまくいかなかったわけですね。そして不況というものが世界中にサブプライムというものをベースにして広がったわけですね。

そしてオバマの前のブッシュ政権では、住宅政策というのを推し進めたんですが、それはお金のない人もぜひ家を持ってくださいというつもりであったはずなんですが、幸福な住まいを作り上げるはずだったのが、逆に投機の対象になってしまふ。そしてそこにつけこんだ金融工学というもっとも先端的なファイナンスの手法が、強欲資本主義、オバマ大統領も、一部の経営者の中にこういうものを動かした人間がいるのではないか。政治の中でそういうことが明確に表現されたのは初めてですが、強欲資本主義というのが今、糾弾をされているわけですね。

そして実はアメリカ人の過大な消費市場を当てにしていた中国は、過大な消費市場を当てにして、色々なものを送り出した。日本の車も言ってみれば、全てではありませんが、その過大な消費市場を狙ったものとして展開されたわけですね。当然そういうモデルが破綻しますから、全世界にマイナスの影響が広がってきているということがいえるわけですね。

そして我が国の産業を支えてきた自動車、これも本当に驚くべきことですね。2007年のトヨタの売上、経常利益、どうだったんでしょうか。最高のものだったんですね。GMを抜いて、1,000万台に販売高が迫りました。24兆円です。1社の売上が、2兆円以上の利益を生み出したわけですね。この24兆円というのは、同じ年度の日本全体の観光市場とほぼ同じ規模です。1社の売上が、日本全体の観光市場と同じ規模である。これも驚くべきことですが、あっという間にそれが破綻して、この3月、4,000億以上の赤字を見込んでいる。これは優秀なMBAを出たような、マーケティングをやっているようなスタッフを揃えていたトヨタですら、予測できなかったんです。

そして下(の画面)に強欲資本主義による金融工学が暴走したと言われるウォール街。これも破綻に瀕して、株価はいつ上がるか、乱高下して、不安定な状況が続いています。こういう大恐慌というものが起こるのではないかなという不安が我々にあるわけですね。そういうものがありますから、なかなか消費が広がっていかないわけですね。

(2 アメリカの大恐慌が教えてくれたもの)

そして実は、1929年に一度アメリカはこの大恐慌を体験なさっているわけですね。

本来はこういうところからもっと学ぶべきものがあつたはずだというふうに思います。株、証券や不動産の過熱によって、1929年にアメリカは既に大恐慌を体験しているわけです。そしてその資本主義という体制は、社会主義や共産主義よりは無論いい体制であるということは立証されているわけですが、しかし同時にこの体制は不況とか恐慌というものを避け得ない、あるサイクルでそういうものにぶつかるといことが内在的にあるといことが言われているんですね。

しかしそういうものが起こるなと思った時に、適切な対応で処置をしていくといことはできるわけで、そういう考え方からケインズ政策という総需要というものを起こして、今のフリードマンたちが言っているニューリベラリズムというのは、全部市場に任せればいんだといことだったんですが、どうもそれが上手くいかなくて、今の難しい状況を生んだ原因になっているのではないか。再び行政、政治というものがしっかりと市場や景気のコントロールをするといことをしていかなければいけないし、それが求められている。また再び、このケインズ政策的なことが注目されてきた。

すなわち今日はお集まりの皆さんは、新しい市場に対して政治家としてしっかりした考え方、政策というのを持たなければいけないといことになります。フリードマンたちが言っていた新しいリベラリズムに基づく経済というものは、政府は小さくすればいんだ。そしてなるべく市場というものにはコンタクトしない、コミットしないというのが原則だったわけですね。それが非常に大きな問題を抱えてしまった。

再び行政の知恵、考え方、明確な志やポリシーというものを持って、市場や景気というものにコミットしていくといことが求められているわけです。私は知事をはじめとしてこの集まりは、そういう明確な意思と哲学を持った組織だと思つているわけですね。

そして1930年代の大恐慌では、ルーズベルト大統領は、様々なニューディール政策という手を打った。ニューディールというのは、新たに富や幸せを配分する、再配分するとい意味なんですね。ケインズはこれに直接関わらなかつたんですが、極めて強いそういう要請がコミットして、単純な市場に任せることのないニューディール、新しい配分をしっかりしていくとい考え方です。それが混乱した農業に対する農業調整法であり、破綻した産業というものを再生させるとい全国産業振

興復興法という法律に展開をされたわけですね。しかしこういうのが上手くいったかどうか、今でも議論されているんです。

無論そういうものが一定の効果を表したから、この1929年の大恐慌は、1940年代になってリカバリーしてきたわけですね。我々はもっと早くそういうものを展開しなければいけないという実情があります。三重の経済をさらに強固にリカバリーしていくためには、やはりこの協議会の考え方がとても大事ですし、それが私は「^{うま}美し国おこし・三重」というものが持っている非常に重要な哲学だと思うんです。

そしてその農業調整法等々、その正否はいまだに、今から半世紀も前に行われていたルーズベルトの政策ですが、良かったかどうかと議論されているんですが、その中でこれはやはり素晴らしいかったというのが一つあります。何なのかというと、アメリカ国民に大きな希望の火を灯した政策、すなわちTVAという政策だったんですね。これは何かというと、「テネシー・バレー・オーソリティ」というある特殊な法人による景気の回復策であったわけです。

これがその中身ですが、何かと言うと、ちょうどアメリカの中心にありますテネシー州という州を軸にして、ここに32の(画面)左側にありますがダムを建設する。そのダムを建設することによって、安い電力を供給する。さらに疲弊した自然というものを再生するという力に変えていくという政策であったわけですね。ケインズの政策で言えば、新しい社会投資を政府が行って、総需要というものを大きく広げていくという政策であったわけであります。

(3 コミュニティ・デベロプメントという発想)

そしてその中に、実は一番大事なコミュニティ・デベロプメントという発想があったわけです。この政策はジョージ・ノリスという上院議員が1933年、1929年から4年経った時にルーズベルト大統領にアメリカの中心にあるテネシー州を軸にして、景気や不況を再生するために新しい投資を行って、未来への希望というものをアメリカの国民の心の中に灯そうと。それを聞いてルーズベルトは大賛成だとすぐ手を打ったんですね。すぐにやりましょうと。そしてその実行部隊が特殊法人のTVAという政策であったわけであります。

そしてこれはどういうことかということ、ダム建設には大きな投資が必要ですよ。これは国庫から出されたわけですが、建設をするためには大きな労働力が必要になります。すなわち失業者を雇用するということになるわけですね。今次々に大きな

企業から中小企業まで、首が切られたり職を失う人が次々に出ています。テレビをひねると、今日は何とかという企業が2万人レイオフを展開するということばっかりですね。この政策は、逆にそういう人たちを政府が軸になって雇用しようという政策であったわけです。そしてそこで生み出された安い電力を使って、地域に新しい産業を生み出す。例えば製粉工場とか、アルミニウムを作る工場ということになるわけですね。そしてその工場の労働者というのは、何年ぶりに給料を貰えるんです。

2年間失業していた労働者が、2年ぶりに奥さんに給料を持ってくる。その時の奥さんの気持ちがある報告書に出ています。今まで色々な救済資金を貰っていたんだけど、働いてこうやって自分の亭主が給料を貰ってくるということは、なんて素晴らしいことなんだろうと。初めて心から亭主に感謝して、今日はビールを1本亭主のために買っておいだ。亭主が働いたお金をそうやって使えることは、どんなにこの家族に幸せをもたらすんだろうか。色々な給付金とか、今度の定額給付金とかありますよね。それも大事な政策だと思いますが、やはり働いてちゃんと給料を貰えるということが、最高の家族の喜びになるわけです。

すなわち三重県においても、新しい職をどうやって作っていくかということが、とても大事です。そのダムは、失業していた人々に給料という光をもたらす。そしてその給料で物を買う。物を買うから工場が製品が増産される。善循環ですね。こういう循環をどうやって生み出していくか。同時にこのダムは、環境そのものを素晴らしい形でルネッサンスさせたわけです。

そしてその時に一人のリリエンソールという3人の理事がこのTVAというのを支えたわけですが、これは若き弁護士であったわけですね。今松阪の今度の市長さんが33歳ということで、本当に若いですよ。このリリエンソールもそれに近い年齢だったわけです。だから今度の市長さんも、リリエンソールのようなスピリッツを持ってやっていただきたいと思いますが、このリリエンソールというのは、ダムを作ることが目標じゃないんです。

失業者をそこで雇用する。雇用した人はそこで一生懸命働く。働いたら商品が売れる。給料を貰える。給料を貰ったらまた商品を買う、サービスを受ける。そうするとまた工場は増産をするということで、今申し上げましたように、まさに資本主義の善循環が展開していくということで、豊かなコミュニティをデベロップメントし

ていく。作り上げていく。これがもっとも大事なニューディール政策の哲学だと。若いリリエンソールがそれを一心に受けて、自分の全エネルギーを投入して、その仕事に入ったわけですね。

（画面の）この方がリリエンソールという方です。困窮するアメリカ国民を目にし、弁護士リリエンソールは立ち上がった。TVA構想実現のため、理事となり、テネシー川流域にダムネットワークを建造し、安い電力で産業を起し、雇用を拡大し、支払われた給料が消費を生み出し、企業活動が再生し、アメリカの経済は復活の道を辿ったと。リリエンソールの新年は、アメリカ国民の幸せのコミュニティ、再生であったと。そういうふうになると、皆さんがお昼からずっと議論されているこのこと、まさにこの考え方ではないでしょうか。幸せ立県を目指す三重、まさにこのニューディール政策のもっとも成功したTVA政策というものに繋がる発想ではないかと私は頭の中でその火がぱっと燃えたんですね。

そして今度の松阪の市長さんもそうですが、このリリエンソールは、私の長い友人である宮本先生が、こういうリリエンソールのような形で、この県に全身のエネルギーを投入してくれるようなことになれば本当に嬉しいなど。私はそれを後ろからバックアップすることができれば、これは三重モデルとして、新たな21世紀の世界が勇気を持つ、こんな厳しい状態の中でも地域から新しい世直しができるぞという事例を作る大きなモデルになるのではないかなと思うわけです。

TVAは雇用を生み、消費を復活させ、自然とコミュニティを再生させた。これがそうですね。失業した人全部集まって、女性も男性もいるんです。みんながこの仕事の現場に行き、荒れ果てた自然がどんどん新たなナチュラルワールドを展開していったということになるわけですね。

（4 地域からの世直し）

今我々が目指すのは、地域から世直しをしていこうという情熱だと思います。コミュニティ・デベロップメントは、「草の根の民主主義」なんですね。皆さんが各市町にお帰りになりますよね。そうするとそこには草の根の人々が一生懸命頑張っているわけですね。その人たちの力を起点にした世直しの思想、これは昔江戸時代に「ええじゃないか」ということでみんな伊勢参りをしたわけですが、そのかつての「ええじゃないか」じゃないんです。他人任せではだめなんです。自らが新しいニューディール政策に全身のエネルギーを投入していく、こういう政策を打っていく必要

があると思いますね。

そして地域市民の豊かな暮らしを実現するというところこそ、不況からの脱出をするテーマだと。リリエンソールは真摯な行動を起こして、その行動を見た大勢のアメリカ国民が本当に感動したんですね。あそこで頑張っているリリエンソールがいる。我々も地域で頑張ろうというふうに、アメリカというのはとんでもない国であると同時に、素晴らしい国ですよ。困った時には一丸となるという精神を持っていますよね。三重の県民も、三重の29の市町の皆さん、そこに暮らす人々も、一つの心根をお持ちになっていると思います。

大恐慌が実は地域社会からのニューディールを求めているという発想は、先程ちょっと触れましたが、オバマのグリーンニューディールということにも繋がるわけですね。オバマ大統領は、国民一人一人のネットワークを展開しようというシンジケートを展開し、メールや何かでやっています。だから携帯電話も本来は国のトップが持つと、そこから秘密が漏れるということですが、その草の根の人たちとは心を繋げたい。そしてそこから、国が上からやるのではなくて、一番末端から新しいアメリカのエネルギーが生まれるぞと思っている。それが伝わってくるんですね。日本でもそうなってほしいなと思います。

ということは、グローバルな時代だからこそ、今度は地域から上のことを待っているのではなくて、地域から新しい世の中を作っていくという運動を起こして、そしてこれは不可能なことではないと思います。一つの例が、これは規模としては結構大きかったんですが、TVAという方法論であったわけです。

(5 ABCDパートナーシップ)

そして地域から新しい社会、豊かな地域を作っていくために、私はこのお作りになった基本計画の中にも、これに近いものが出ておりますが、カギになるのは、このABCDパートナーシップではないだろうかと思うわけです。これは一体何なのか。国政が日本ではなかなか厳しいですよ。意識としても何となく頼ってやるというよりも、やはり自分たちで自立的に何かできないかなという思いが強いと思いますね。本来国もしっかりとするし、国ともパートナーシップを組んでいかなければいけないのは当然のことですよ。我々はまさにそういうことを思っているわけですが、同時に地域社会からも新しい芽を出していくという、そういう計画を着々と進めていかなければいけないと思います。それが「草の根民主主義」であり、「コ

コミュニティ・ニューディール、アメリカの場合は国家のニューディールでありましたが、三重県にとっては、コミュニティから新しい幸せや経済や文化の再配分を進めるという世直しということができないだろうかというふうに思うわけですね。

そしてこのA B C Dというのは何かというと、お手元にあります、Aというのはアドミニストレーションで、行政のことです。すなわち今日お集まりの皆さんは、このA B C Dパートナーのセクターの一番頭にあるA、行政セクターですね。Bというのは何かというと、ビジネスのB、すなわち企業セクターであります。企業も頑張っていたかなければいけないわけであり、なかなか三重の地域企業も頑張っている企業がたくさんあります。そして市民自身が行政を頼るというだけではだめです。自らが地域起こしをやり、自らがコミュニティビジネスを立ち上げ、福祉や自然をリニューアルしていくようなことをどんどん起こしていくということも必要ですね。市民、すなわちシチズンですから、Cということになります。そしてNPOとか、例えば商工会議所、青年会議所といったものは、公益的なセクター、Dというのは何かというと、デモクラティックオーガニゼーションのDになります。公益のセクター、NPOとかそういう民間に近いセクターですが、こういう社会には、コミュニティには4つのセクターが活躍しているわけですね。

そして今までは実はこれらはばらばらだったわけです。しかしそれらが時には協働する。そして支えあう。あるいは融合して一つの組織を作る。こういう変幻自在なコミュニティセクターが、複雑な社会問題を解決していく。がちっと固まった一つの組織では、この激しい時代状況に対応できません。

トヨタの悪口を言うわけではございませんが、課題適応すると、素晴らしい車を作る生産能力は世界でトップだけど、不況になった時に、その方向を変えようというのは、大変難しいわけですね。むしろ地域の小さなセクターがフレキシブルに集まって、福祉の問題に対応する。コミュニティビジネスで新しいビジネスを展開する。新しい地域のブランドビジネスで、世界でトップのシェアを作るなんていったときには、フレキシブルに対応していくことが一番効果を表すわけですね。すなわちパートナーを組むということが重要な戦略のポイントになるわけですね。

したがって今日、皆さんがお帰りになった時の自分の地域で、自分の市や町でどういうセクターがあるのか、これを全部チェックしてください。NPOセクターや、様々な公的セクターもあるでしょう。市民団体もたくさんあるはずですね。行政が

出している色々な事業もあるはずですね。そこで仕事の仕分けと、同時にパートナーの関係性の再創造、これをやりますと、まさに新しい地域からのニューディール政策が可能になるわけです。

これがコミュニティセクターのA B C Dです。特に行政セクターはAですね。左上、これが経済と文化ということに主に。企業セクターが経済と産業、市民セクターは文化と生活というものを支えなければいけない。それから産業と生活については、公益セクターがコミュニティビジネスを担ったりする。そしてそれが集まって、フレキシブルなパートナーシップを複合的に作るのが真ん中のコミュニティセクター、あるいはこれをスーパーセクター、第三セクターというのがありますが、あまり第三セクターというのは言葉として評判がよくないですよ。ここではしたがって、コミュニティセクターとか、スーパーセクター、これは色々な形態があります。皆さんのところで創造的にこのセクターを作ればいわけですね。今までにないような。そしてあることについては、企業セクターが頑張ってもらう、あるところは市民セクターがちゃんとやりましょう、あるいはNPOや商工会議所をお願いするということも当然出てくるわけですね。青年会議所が頑張ってまちづくりをやりましょうということがあって、これは力として十分に活用していく必要があると思います。

(6 世界モデルとしての三重モデル)

さて、こういうことを考えると、実はもう既にこういう動きが東京にいても、伝わってくるんです。三重の活動が。これからご紹介するのは、もう皆さんの足元で具体的にその首長さんもおみえになっていると思いますが、三重というのは地域の世直しモデルとして先進的な取り組みが県の各所に見られる。リリエンソールは電力のダムを作りましたよね。ところが、これから我々が作らなくてはならないのは、文化力。文化のダムなんです。29の文化のダムを作るというのが私のメインの提案なんです。アメリカはハードなダムを作りました。三重ではソフトな文化のダム、文化力を使った新しいエネルギー、これを生み出しましょうということですね。

そしてここには多気町の高校生の「まごの店」、これは東京でも大評判ですよ。東京でも多気町へ行って、高校生のやっているレストランで食事をしたいなという方が私の周りでも大勢いるんです。大評判です。これは地域づくり。あるいはもう歴史がありますが、コミュニティビジネスのプロトタイプとして、モクモクファーム、

これも有名ですね。亀山市の亀山モデルというのがありますね。これは2つあります。企業が作ったものと、歴史的な遺産、地域資源というのを活用したモデル。この2つの亀山モデルを持っているということは素晴らしいことですね。こういうところはあまり世界的にもないというふうに思います。

そして心の時代。政治があまり宗教に関わるということは難しいことかもしれませんが、伊勢講というのは観光ビジネスでこれから研究しなければいけない重要な課題であると業界の中では考えられている。これは世界モデルにしたいなと思っている。こういうものがたくさん今色々なところに芽が出て、色々なところにしっかりした実を生み出しているのが三重県なんですね。これをこの文化のダムを29ヶ所、しっかりと作り上げましょうと私は宮本先生にトータルコーディネートしてもらって、リリエンスールのようなスピリッツで作り上げる。こういう企画、計画は、私も色々な県にお招きいただいたり、アドバイスをしておりますが、他にありません。だから素晴らしいなと思って感動したわけですね。

今疲弊し、地域格差に呻吟する日本の世直しモデルとして、三重モデルは大変大きな意味を持ちますよということを申し上げたいわけです。この県と市町が手をつないで、新たな文化のダムを作るという政策、これは本当に大きな、これからの世界的な今厳しい状況の中で、希望の火を灯すモデルになると思うわけです。

各市町がそれぞれ世直しモデルを創造し、「コミュニティ・ニューディール」を推進する「市民生活の豊かさ世界モデル」というものを三重から是非出してもらいたいなと。今までは工業出荷額が一番だといったような時代から、一番幸せな人々が、そう思う市民が大勢いらしているのが三重県であるという発想を持っていただきたいと考えているわけです。

そしてこれを具体的に落としてみますと、例えば行政セクター、これは県産ブランド、これは私がお手伝いしたものを通して、今地域に落ちているわけですね。最初は県が引っ張って、こういう県産ブランドというものを展開したわけですね。企業セクターが頑張っているというのは、亀山におけるシャープ、まさにこれは亀山モデルといって、世界中に売り出したわけです。

今この不況の中で大変厳しいんですが、頑張っていますよね。そしてオバマ大統領のグリーンニューディールというものを私はシャープが中核になって支えられるのではないかと。当然日本の先進的な環境技術を世界に発信するという意味での亀

山モデルというのも、単純にテレビではありません。これからは環境モデルということで、シャープというのは世界企業になってくると思いますね。

それから歴史まちづくり法というのができました。そしてその第一号に亀山が認定されているわけであります。市長さんは自慢ですよ。日本の第一号に亀山、この技術のほうでも世界モデル、歴史文化、文化のダムですよ。まさに城下町にあった町並み、これはまさに文化のダムそのものが目の前にある。これを磨くと。そこには大変なエネルギーを起こす、充電するストックがあるんです。石油だとか石炭に代わるような、文化の石油石炭が、亀山には重層化してあるわけですね。

私はこれは市が軸になり、国も応援するわけですが、市民がやってもらいたいなと。市民が頑張っ、自ら自分たちで地域の歴史エネルギーというものを磨いてもらいたいなというので、あえて市民セクターのところに持っていつているんです。本来は県とか市とか、国も関係するんですが、市民にお願いしたい。それから公益セクターとしては、農人法人としてモクモクファームというのが出てきて、これは今農業改革という意味で、日本中の大きなモデルになるし、中国でもこのモクモクファームというのは注目をしているわけです。

これが相可高校の「まごの店」。おばあちゃんの店がまわったわけですよ。私は嬉しいのは、おばあちゃんが孫を支えるという、孫がおばあちゃんを喜ばせるという、こういうパートナー、嬉しいパートナーシップですよ。こういうモデルをたくさん三重県に作ってもらいたい。いい笑顔ですよ。見てください、一人一人の笑顔。素晴らしいですよ。これは実は町が基本計画を、町の担当のお役人が一生懸命考える。そしてこの県立高校の調理の先生が色々アイデアを出して、こうしたらいいとか色々開発した。そしてふるさと村のおばあちゃんやおじいちゃんたちが、孫たちを頑張らせようと。だから出たメニューがレストランの食事もおいしいでしょう。だけど私はここに溢れている町民とおじいちゃん、おばちゃんのまなざし、孫たちに対する、それからその高校生のエネルギー、これが一番おいしいメニューだと思うんです。そのメニューを食べにくるんです。東京からも大阪からも。こういうものを29とは言わず、30も40も作っていただきたいなと思うんです。

それから日本でコミュニティビジネスというものが10年前に出まして、そしてその中で大変大きな注目をあびた、1988年に養豚業者が200万円ずつ20の人が出して、こういうものを作ったんですね。農人法人。木村オサム社長ですが、平成16

年で37億。ちょっとデータを見たらこれしかありませんでした。今はもう40億くらいいっているんじゃないかと思います。雇用もどんどん増えている。100万、200万の人が、このコミュニティビジネスの成果を見にやってきますよ。こういうものが29の中に埋め込まれたら、それこそ文化の宝の山になるんじゃないでしょうか。

これがシャープの亀山モデルですね。よくシャープさんもここで頑張ってくれています。今厳しいですよ。厳しいけれどシャープの場合には、環境ビジネスという切り札があります。これは世界でトップの技術水準を持っていますから、まだまだ戦えます。それをみんなでまた応援してやったらいいですよ。

一方でこういうものがありますが、21世紀もっと大事なものはこれなんですよ。地域のストックされた文化。これが地中の石油や石炭以上のエネルギー源になるんです。まさに三重県が言っている文化力ということですね。こういう残された文化の石炭石油を、これからどうやってうまく磨いて、大勢の人に感動を与えることができるのか、やはり行政も無論バックアップするわけです。市民力、市民のもてなしや、文化というものを理解する、こういうものが大きな意味を持つてくると思いますが、

私は国も立派だと思います。歴史、まちづくりというものをしっかりと支援して、そのためにはお金をちゃんとつけて残していこう。残すだけではない、そのことが地域の子どもたちにも大きな勇気を与える。こういう政策はどんどん活用していったらいいと思います。その意味で、文化の亀山モデルというものに対しても、大きな期待が寄せられると思います。

それから何と言っても、伊勢神宮というのは素晴らしい。ダイヤルワトソンという生命学者が、世界で3つの素晴らしい神聖な場所がある。地球の真ん中からメンタルなエネルギーが3ヶ所出ているというんですね。1つはギリシャ。2つ目はイギリスのサイクルストーンですよ。3つ目がこの伊勢であると。ダイヤルワトソンという学者が言っているんですね。私も何回も行きましたが、心がさっと洗われますよね。

それから素晴らしいのが、一神教だと戦争が起こるわけです。今行われているのはそういう形ですよ。しかし日本の神様というのは、まさに様々な神の存在というのをお互いに認め合うという素晴らしい精神がその中にあるわけですね。そして神と自然の偉大なる共生というのが行われているわけですが、こういう素晴らしい

ツーリズムというものを、実は御師とかオシと言われる方が導いたわけです。これからは、文化の御師というのが大事ですね。そしてその人たちが世界中から三重にお客様を誘引する、こういう役割を果たさなければいけないと思います。これも宮本先生にお願いして、基本デザイン、グローバル御師という人物像というものを描いてもらいたいなと思います。

なぜかわからないけれど、東京や大阪をすり抜けて、インバウンドということを言われていますが、なぜか大勢三重に各国の方がいらっしゃるなど。日本からもなぜか他のところは全部不況で観光客が落ちているのに、三重だけなぜ集まるんだろうか。なぜアメリカの人やフランスの人やアジアの人が多いんだろうということ、コーディネーターの御師というのが今に蘇って、世界中から文化のプレゼンテーションというのを見にやってくるということになったら、これは素晴らしいことになるなと思います。

そしてもう一つ、これは私が関わったやつで、今三重ブランドというのは認定制度になっていますね。だけど我々の県でやった提案は、本来は作られたものを認定するだけではなくて、そういうものを作る人間をたくさん生み出そうと。要するにブランドクリエイター。カルチュアルクリエイターなんです。文化のクリエイターを各地域にたくさん生み出そうという計画案だったんです。そのためのアカデミーだったんです。

ただ残念に、予算などの関係で、ここはどうも知事がいらっしゃいますが、カットされてしましまして、残念ながら、本当はこれがあつたら私が校長になる予定だったかもしれませんね。これは要するにカルチュアルクリエイター、あるいはカルチュアルデザイナーという世界で初めての役職というか、人間を三重から最初に生み出そうという提案だったんですが。これもまた知事にお願いして、再考してもらおうかなと、高い席からお願いをしておきたいなと思いますが。

今そんなことを言わなくたって、的矢かきから三重の真珠からお茶から、世界的に有名な松阪牛から、安乗ふぐなんてありますよね。だけどこれはもう伝統的にある。これから新しいものをどんどん人間を軸にして作っていこうという1,000商品、私は目指しているんです。1,000の本来は世界商品がある。そしてそれがイギリス有数のデパートであるハロッズの商品カタログと並んで、三重の1,000商品のカタログが飛ぶように売れるようなそういう文化立県を目指していただきたいと思う

んです。頭の中にそういうイメージがありますが、残念ながら今この段階でとどまっていますね。

(7 3つの「ちえ(知恵・地恵・治恵)」資源の共同体へ)

さて時間もだいぶ経りましたが、最後に3つの知恵ということが勝負所ですよということを申し上げたいわけです。さっき申し上げましたように、三重の知恵ということですね。三重県には三重の知恵資源が存在する。実はこの知恵も三重県の財産です。資源です。

原点にまず三重県民の人間の知恵、発想があるわけですね。「まごの店」。町の方がアイデアを作りました。おばあちゃんたちが孫を男にしようというような愛情があふれていましたよね。農産物の人たちは、本当にいい商品をレストランに卸してやろう。生産者の愛情もありましたよね。これは人間の知恵ですよ。それを取り巻く地域が恵む。地域に残された恵んでいる知恵があるはずですよ。

宮本先生にお願いすることが多いんですが、知恵の棚卸リストというのも出して、今もうあるかもしれないですが、29の地域がどのくらいの文化と知恵の棚卸があるか、これは面白いですね。それらを活用するまさに一番重要な三重の知恵は何かというと、行政の知恵です。今日お集まりの皆さんが地域の文化を目利きして、見通し、そしてその育成の手法というものをしっかりと宮本先生と組んで展開していくということが大きなポイントになるわけですね。

今申しましたように、「まごの店」ばかりで大変恐縮です。他にもたくさんありますが、私がたまたま持っていたデータを使いましたので、このお店ばかりになってしまって大変恐縮ですが、これだけではないですよ。「まごの店」には高校生と指導する先生の資源、頭の知恵ですね。地域の豊かな無農薬野菜というような、これは土地の恵みですね。そしてビジョンを描いた行政の担当者の行政の知恵。これが見事に三重丸を書いて生み出されたわけです。こういうものがどんどん出てきたら、本当に三重県を訪れることがわくわくしますね。

そして豊かな人々の暮らしを実現する3つの知恵の自己組織的共同体。これは生物学用語です。高等な動物ほど、自分で組織を自己組織化する。誰かに言われたりするのではない、国から補助金が出るということではない、自分たちでファンドを作り、自分たちで資源を開発し、自分たちでアテンドして、もっともいい幸福の形をそこで作り上げる、そういう三重県を私はぜひ目指してもらいたいなという思い

が私の胸の中にいっぱいあります。

これが三重丸の知恵の資源共同体モデルでありますね。一番に市民の知恵、これは今2つありますが、もっとたくさんあるわけですね。ここにはたくさん落としてあります。もういっぱいになるくらいある。その上に地域の知恵がある。最後に行政がしっかりそれを受け止めるという、まさに三重丸ですよ。これがいっぱい資源、事業で、コミュニティビジネスやそういう事業で溢れるようなことになれば、リリエンソールが考えたコミュニティの豊かさというのを作ることになるんじゃないかと思います。

(まとめ)

最後に私の「コミュニティ・ニューディール」提案のまとめでございます。まず三重県下の29の市町がそれぞれ文化力を駆使した文化のダムを作りましょうということですね。今1つのダムがあるところは、2つ目、3つ目に挑戦をしていただきたい。そうすると30になり、40になり、100になる。100のダムが三重県下に根を下ろしたら、どんなに素晴らしい文化エネルギーを世界中に発散することができるでしょう。それを見にくるだけでも、引きも切らない文化観光、カルチュラルツーリズムと言うんですね。今これは文化のテーマで観光が世界中に流行していますが、そのメッカになりますね。

2つ目。文化のダムは人々の幸せの暮らしづくりのエネルギーを供給するダムである。「まごの店」はおばあちゃんにもおじいちゃんにも、行政にも市民にも、そして一番大きなエネルギーは、若者たちが授かりましたよね。そしてその若者たちから独自に自分たちでコミュニティビジネスとしてレストランを立ち上げる人も出てきましたね。涙が出るほど嬉しいですね。そしてそういう人たちが、地域の施設のお年寄りたちに食事を提供するとか、あるいは隣町の小学校の給食のメニューを開発するのを手伝いする。あるいは東京にも出て行って、東京の人への新しいコミュニティレストランのノウハウを提供するということにもつながるのではないのでしょうか。

3番目。その担い手はさっき申し上げました ABCD パートナースHIPという新しい組織です。ダイナミックにその事態に対応するある時は市民が主役、ある時は行政が引っ張っていく。ある時は地域企業が踏ん張ってファンドを出して頑張るといようなこともあると思います。特に市民を中心にした複合組織コミュニティセ

クターが大切な役割を果たしていくでしょう。これからは小さくてもいい、しかし気の利いた、心のこもったビジネスやファンドを用意しなければいけない。やはり市民力というのが文化力に並んで大きな力になると私は思います。県民ということですね。

そしてこれからは、地域の豊かさというのは何で図るかということ、今まではGNPでしたね。グロスナショナルプロダクト、要するに工業生産や技術生産というものがその国の力を図っていたわけです。しかしこれからは「GCH」。このGCHというのも三重県が最初の指標です。何かと言うと、「グロス・コミュニティ・ハピネス」という、皆さんの町の幸せ度。どのくらい多くの工業出荷額があるかではなく、本当に幸せな暮らしをしているという人がどれほどその地域に暮らしているか、これが大事な新しい指標になりますね。

実はこの指標については、マーサーというシンクタンクが、既に10の指標を開発しています。これについてはデータを宮本先生にお渡ししますので、独自の幸せ生産指標というのを三重県で作らしましょう。そうしますと、これが世界中にあの指標を参考にさせてくれというので、アプローチがあるようなものを私は作っていきたいなと。そしてそれが一番進んでいるのはどこかと言うと、アメリカでも中国でもイギリスでもフランスでもないんです。よく最近注目されていますのはブータンですね。ブータンという国こそが、ブータンはGNHと言っています。GCHとは言っていないんです。これは三重県だけですね。むこうはやっぱりナショナル、国というレベルなんです。こちらは地域という単位で幸せな競争をしなければいけないと思います。

これが5番目の私の最後の提案のまとめですが、県と市町が協力し、数年後にそれらの幸せづくりの成果を幸せ博覧会という会を開いて、研鑽をする世界一幸せのコミュニティづくりというものに邁進をしてもらいたいなと思うんです。先程申し上げた29の市町が、文化のダムというものをお披露目するわけです。そしてこういう事業や考え方やデザインによって、こんなにも地域の人たちが幸せに暮らしていますよということ自体が、博覧会の対象になるわけですね。だから巨大な施設は一つもありません。

これから市民が色々なチームを作って、自分たちのアイデアを作って、そしてそれを実現する事業をやると宮本先生にお聞きしました。その事業を推進することに

よって、県や市町が色々な支援の施策を出すでしょうね。その過程や結果が博覧会の対象になります。

そうしますと、29 なんていうのは一日で見れませんから、10 見るのに3日間かかる。3日間来て、今度はワイフと一緒に来たいなと、奥さんと一緒に見に来るわけですね。その暮らしぶりを。それも3日間で10しか見れない。一つのファミリーが3回も4回もこの地域にやってきて、それを自分たちの帰った地域の暮らしの幸せの役に立たせるというような、新しい知の観光が三重県から始まるということになるわけです。こういう幸せ博覧会という手法というのは、これまでありませんでした。

宮本先生は既に四国で町並み博というのをやっている。大成功を収めておりますね。これも地域の市民を軸にして、一生懸命育てたものが、文化の一つの結晶としてあったものを磨いて作った。これも幸せ博の一つのモデルかもしれません。そういうご経験がありますから、これを全県にわたって展開するような、全県がすべて幸せ博覧会になるような、こういう世界で初めての博覧会。これから上海とかいろいろなところである世界博がありますが、それに代わる新しい博覧会の手法としても、ここで新たな芽がでてくるんじゃないでしょうか。そんなわけで私は大変大きな期待を持っているわけですし、微力ながらお手伝いをしていきたいなと思っているわけです。

これが今最大の注目を浴びているブータンの国民総幸福度ということですね。ここでもワンチク国王がまだ若いんです。国王がこういうことを、彼のおじいちゃんくらいからこういうことを発想しているんですがね。ここは国王制だったんだけど、議会制民主主義を提案して、国王自ら議会制民主主義を提案したら、国民は今は幸せだからそんなことをする必要がないと、逆におっしゃったというので、本当に国王も国民も幸せですよ。私はぜひブータンとも手をつないで、三重モデルを世界モデルにしていきたいなと。松阪からもワンチク国王がどうも出そうですから、ぜひ松阪のGCHの実現トップランナーになってもらいたいと期待しています。

それで見てください。この子どもたちの笑顔。素敵な笑顔ですよ。この笑顔は、さっきの孫の店の高校生の笑顔に通じますよね。三重県を訪れると、むっとしていた人間がなぜかニコニコして帰ってくるというような、東京でニコニコしているのを見たら、あなた三重県行ってきたでしょ、よく分かったなと言えるような三重県

にしていきたいと思います。私は思います。

市民とNPOなど、そして地域企業と県、市町が愉快で楽しいパートナーシップを築く、これが大事です。眉間にしわを寄せて作るようなパートナーシップではありませんよ。愉快で楽しい知事を軸にして、市長がパートナーシップを組む、これをお願いしたいと思います。それぞれがこの豊穡な土地に自らが知恵を絞り行動する。「草の根民主主義」をしっかりと根付かせる。これもお願いしたいと思います。

そして世界で一番の幸せの市民が暮らす社会を目指して、「コミュニティ・デベロプメント」に挑戦をしていきたいと思います。世界中から大勢の人々が幸せの伊勢講を活用して、三重県にやってくる。豊かで幸福な人々の暮らしを体験するために。年寄りたちが笑い転げ、大人たちは誇りと自信に満ち、子どもたちが未来に大きな夢を膨らませる、そんな町々を作り上げたい。これが私の願いです。どうも長時間ありがとうございました。